

みて、さわって、なめる……!? 山東町

現在山東町には、町の天然記念物に指定されている樹木が4件（20本）あります。豊臣秀吉が長浜城主時代に植えたとされ、幹周りが5mを超える薩摩杉が17本も並ぶ八幡神社杉並木（西山）。同じ西山区の入口で幹周りが約7.2mで推定樹齢が700年以上とされる櫻。長岡神社で幹周り約5.7m、樹高約27mを測り、幹の中程に「銀杏の乳」が垂れ下がるイチョウ（長岡）。中世以降当地を治めていた京極氏が、伊吹山から一株の苗を投げ、その飛んだ所を墳墓にしようとしたところこの地まで飛び、根付いたとされる柏櫻（イブキ）（清滝）。これらの内、西山の櫻以外は滋賀県自然記念物に指定されています。

しかし、数百年の星霜、病気、環境の変化などによるものか、活力がなくなってきたのではということから、隣の浅井町の樹木医、滋賀樹木クリニック・金森亮太郎さんに診察を依頼しました。金森さんの診察のポイントは、みて（観診）、さわって（触診）、なめる（舌診）。



清滝の柏櫻を“さわる”

情報 BOX

- ◆近江町教育委員会では下記の文化財啓発ビデオを刊行しました。
『淡海文化』近江町のまつり
近江町に残る3種の「奴振り」と、2種の「奉納相撲」などをはじめとした貴重な無形民族文化財の紹介ビデオ。（VHS・20分）
◎問い合わせ先
近江町教育委員会 社会教育課文化振興係
☎0749 (52) 3111
- ◆『伊吹町史』発刊のご紹介
既刊『伊吹町史 自然編』（B5版、314ページ）
カラー写真をふんだんに使って伊吹の大自然を紹介しています。
既刊『伊吹町史 文化民俗編』（A5版、837ページ）
山麓の生活文化がいきいきと甦ります。
既刊『伊吹町史 通史編・下』（A5版、810ページ）
明治以後の伊吹町と各集落の歩みを紹介しています。
既刊『伊吹町史 通史編・上』
続刊『伊吹町史 資料編』
◎問い合わせ先
伊吹町役場 地域振興課
☎0749 (58) 1121
- ◆米原町教育委員会では米原町内を縦貫する江戸時代の街道、中山道、北国街道沿いの史跡・旧跡のガイドブックを刊行しました。
『米原町街道ウォッキング～中山道・北国街道～』
◎問い合わせ先
米原町教育委員会 社会教育課
☎0749 (52) 1551

◆◆編集後記◆◆

『佐加太』第7号をお届けします。本紙の発行は、原則的に年間2回を予定しています。95年3月の創刊号発行から、5月（2号）、11月（3号）、96年9月（4号）、3月（5号）、97年6月（6号）と今回の10月ということで、愛読者（？）の皆様方からは“いったい、いつ出るのか”というお叱りの声もちらほら聞こえてまいります。これからは、できるだけ定期的に、しかも新鮮な情報を提供供できるようがんばっていきます。

先日、坂田郡社会教育研究会文化財部会では、丹後地方に研修に出かけました。主として、今後郡内でも取り組まれていくであろう遺跡整備について、加悦町の古墳公園等を視察するものでした。また、大江町では鬼を題材に町おこしが進められています。伊吹童子は伊吹山を追われて大江山に移り酒呑童子になったといいます。2つの山は、鬼伝説と製鉄跡でつながっていました。

坂田郡文化財ニュース
佐 加 太 第7号
発 行 平成9年10月30日
編 集 坂田郡社会教育研究会文化財部会
事務局 〒521-03滋賀県坂田郡伊吹町春照37
伊吹町教育委員会生涯学習課
0749 (58) 1121
印 刷 立木印刷

木肌をなめると樹の健康状態がわかるのだそうです。今回の診察結果をもとに、次年度以降に機会を得ながら治療していきたいと考えていますが、特に樹木をはじめとした生き物は、単に所有者（管理者）と行政がお金をかけて治療すればよいというものではなく、保存等に対する地域住民の熱意と行動がなければ後世に伝えていくことは難しいと痛感するものでした。



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました。

第7号

1997年10月30日

滋賀県坂田郡社会教育研究会
文化財部会

湖北の山岳寺院 — 米原町松尾寺遺跡調査概要—

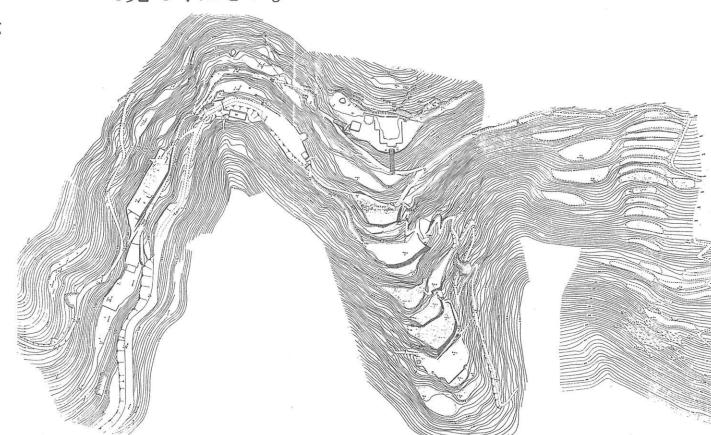
松尾寺遺跡は米原町上丹生に所存する平安時代から江戸時代にかけての山岳寺院跡です。寺伝では天武天皇9年（680）に役小角が入山して、元慶年中（870～884）に松尾童子が最初に堂塔を起こした伝えられています。嘉吉元年（1441）に記された『興福寺官務牒疏』によると靈仙寺七ヶ別院の一つであったようです。平安時代以降、天台寺院として栄え、盛時には寺坊が50余坊も存在していましたが、江戸時代後期から明治時代初頭にかけて衰退してしまいました。

近年、倒木や土砂崩れによる遺跡の崩壊が著しく、このままでは地域の大切な文化遺産が消失する可能性が出てきました。そこで米原町教育委員会では、松尾寺遺跡を将来的に史跡として保存・整備していく方針を打ちたて、平成3年度より遺跡の範囲確認と実態解明のための発掘調査と地形測量に着手しました。調査の結果、明らかになった点をいくつか示すと以下の通りです。

- ◎ 現在の寺坊の景観が完成するのは江戸時代に入ってからのようです。
- ◎ 現在残っている本堂跡は江戸時代（元禄年間）に再建されたものです。
- ◎ 本堂基壇の調査では基壇中央部で地鎮の跡が確認されました。地鎮具として、銅碗2個・鉄製灯明皿1枚・



松尾寺遺跡本堂跡調査風景



松尾寺遺跡地形測量図 (S=1/5,000)

坂田郡の遺跡案内 古代寺院編-その2-



白鳳時代の瓦を出土する遺跡の中には、「寺院跡」として特定できるものと、そうでないものがあります。

米原町磯に所在する堂谷遺跡は、古くより主要伽藍の屋根を飾った鶴尾が出土しており、寺院推定地とされてきましたが、近年では「瓦窯跡」の可能性も考えられるようになりました。同様の例は、山東町本郷に所在する法泉寺遺跡にもみられ、隣接する丘陵部を生産遺跡と推測する向きもあります。

また、寺院跡でありながら、古瓦の散布範囲が広範囲に及ぶ場合があります。

近江町高溝に所在する法勝寺遺跡では、南北約600m、東西約400mの範囲に古瓦の散布が認められ、広大な寺院跡として認識されてきました。近年に実施した発掘調査では、白鳳期に寺院が創建され、平安時代中期頃に修復を受け、その後の平安時代後期以降に周辺が莊園開発された際、古い瓦片を運び出したことが明らかとなりました。

その他、東山道に面した「横川駅家」にも瓦葺きの建物があったと推測されています。山東町梓河内もしくは米原町枝折に推定されている駅家の遺構をつきとめる上でも重要なチェックポイントとなりそうです。

談議（義）所って—談議所遺跡— 山東町

談議所遺跡は、大字柏原向山の南東に開けた天台宗成菩提院の境内地に周知されています。

平成8年度、この談議所遺跡内に防火水槽新設の計画がなされたことから、工事に先立って確認調査を実施しました。調査の結果は、成菩提院等に直接関連する遺構や遺物は確認できませんでした。

『大日本寺院総覧』(大正5年刊)に、「寂照山。坂田郡柏原村に在り。(略)天台宗海道三談林の随一にして、柏原寺談議所といふ」とあり、成菩提院は談議所といわれていました。

では、談議所とは一体何なのか。一般的に言うと、特に鎌倉から室町時代にかけて栄えた学問中心の寺のことです。元来、寺というと学問を中心とした信仰の場ですが、中でも談議所は都から離れた所に発達したと言われています。これは、例えば地方の僧がいきなり比叡山に登って学ぶことは事実上困難なことから、天台教義を極

めた学僧が地方に住めば自然とこの僧に学ぶ者が出てきて、おのずと談議所が成立するということです。

それでは、成菩提院はどんな談議所だったのでしょうか。先の『大日本寺院総覧』中に、「天台宗海道三談林の随一」とありますが、海道は中山道筋、談林は談議所と同義語とされることから、成菩提院は中山道筋にある3つの談議所(成菩提院、川越の喜多院、1つは不明)の中で随一であると唱われています。これらのことからも、成菩提院の歴史の重さがうかがえます。(桂田峰男)



成菩提院客殿・本堂

京極氏館跡庭園（その2）伊吹町

6号に引き続き京極氏館跡庭園について紹介します。

庭園の庭石として使われている石は約100点、大小さまざまな大きさですが、長軸が2mを超える石が中央の「虎石」を含めて5つもみられます。

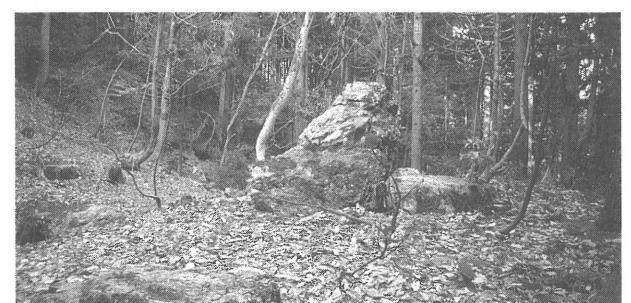
使われている石の約85%はチャートで、とくに60cmから3mのものはすべてチャートです。池の石組の小さなものにわずかに砂岩などの河原石が用いられています。また、池跡に散らばっている碁石大の河原石は、池の底に敷き詰められた玉石の一部かもしれません。

このような巨石はどこから運ばれてきたのでしょうか。これを確認するために、館跡の眼下を流れる藤古川を歩いてみたところ、庭石に使われているようなチャートの巨岩や、池の護岸に使われている硬砂岩が河原に散在していました。身近な石材でこのすばらしい庭園が作られたものと思われます。

現在庭園跡一帯は杉の植林でおおわれています。測量

にあたっては、現在生えている樹木の名前も図面上に記入しました。植林の杉の他に、かえで・ひさかき・ゆずりは・まきなど、庭木として用いられる種類もみられます。

庭園の全体像をつかむためにはさらに詳細な調査が必要と考えています。(高橋順之)



庭園跡

法勝寺修復期の軒瓦 近江町

近江町高溝に所在する法勝寺遺跡は、縄文時代早期から平安時代後期まで続く複合遺跡。詳しくみれば、10期の時期から構成されています。

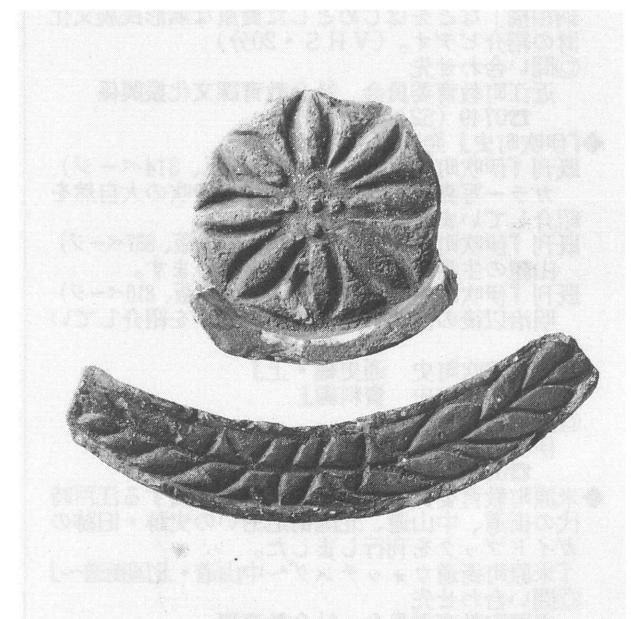
なかでも寺院に関連した遺構は、創建年代を示す白鳳期のもの、修復年代を示す平安時代中期のもの、莊園開発年代を示す平安時代後期のものに大別されます。

滋賀県内に残る多くの寺院遺構は、白鳳期創建の資料が大半をなす一方で、修復年代を明確にしたもののが極めて少ないことを特徴としています。県南部の大津市域では、平安時代前期を中心としたロストル式平窯が何基も確認されていますが、滋賀県全体では、修復瓦の生産はもとより、寺院自身の修復過程を明確にする資料が発見されていません。

ここに紹介する資料は、法勝寺遺跡の修復に使用された平安時代中期の軒瓦です。外区をもたず肉葉が連続する文様を構成する軒平瓦と、弁幅の狭い軒丸瓦から構成されています。

このように資料が少ない背景として、北近江の平安時代寺院の多くが「瓦葺」されていなかったものと推測さ

れおり、あえて瓦葺で修復された法勝寺遺跡は、珍しい例に含まれるかもしれません。(宮崎幹也)



法勝寺遺跡 修復期の軒瓦